

日本人が自分の頭で考えるとき

When Japanese think with their own brain,

得丸 久文 Kumon TOKUMARU

カラハリプロジェクト (Kalahari Project)

Abstract: The author proposes a hypothesis on the mechanism of linguistic processing and intelligence, influenced by Dogen and ARAKAWA, Avant-gardes of Japanese philosophy. Variety of colorful natural stimuli allow humans to have healthy spirit.

梗概: 道元と荒川修作という日本の前衛思想家の仕事に影響された著者は、言語処理と知能に関する仮説を提示する。ヒトは自然の多様な刺激を全身に受けることで健全な精神をもてる。

1. 日本の現状

自分の頭で考えない社会

日本では自分の頭で一生懸命に考えた結果を口にすると、「理屈はいらない」、「頭で考えていてはダメ」などと否定的に扱われることが多い。法律や条例の規則にしたがって、労働者や児童を守るために必要とされることであっても、周囲が沈黙しているときに一人だけ声を上げると、白い目でみられ、みんなから浮き上がるだけである。

日本で、自分の意見を口にすることや自己主張することが嫌われるのは、隣人のやることをうかがって真似すればよい、水田稲作の伝統だろうか。

わずか2-30年前に、「個性豊かな人間」、「国際社会で活躍できる人材」といったものが教育の目標となっていたはずだが、ここ数年は耳にしない。

外国の理論や学説を盲目的に受容

科学研究においても、第二次世界大戦前には、八木宇田アンテナ、千葉勉・梶山正登の母音の研究、中嶋章の継電器回路の研究など、世界に先駆けて人類を導く前衛的な内容のものが多かったように思う。戦後はコンピュータのOSである坂村健のTRONや人類学者島泰三の霊長類研究など独創的であるが、全体としては世界にたいする貢献が減っていないだろうか。戦前の日本人のほうが、よく勉強し、よく身体を動かしていたのだろうか。

戦後独創的な研究が減った原因のひとつとして考えられるのは、外国の研究者がつくったモデルや理論を、生まれた背景を吟味することなく、日本人研究者がそのまま使っていることがあげられる。

外国のモデルや学説は、簡単に使いこなせるもの

ではない。十分な吟味をせずに使っても、意味ある結果は生まれないのではないか。しかし、指導教官に疑問を呈することが許されない社会なのだ。

認知科学、人工知能、ニューラルネットワークなどの分野で、日本独自のモデルや仮説はまだ生まれていない。日本人のよいところを生かして、独自性のあるモデルや理論が構築されるべきではないか。筆者のデジタル言語学はそれを目指した仮説である。

2. 身心一元論と二元論

日本の思想である身心一元論

日本では古くから「ヒトとサルとの違いは毛が三本(ヒトのほうが多い程度)」と言われてきた。ヒトが他の動物よりも崇高であるという考えは、欧米に比べると弱い。

修験道や禊修行、千日回峰行など、身体を酷使することで精神を高めようとする荒行は、21世紀の今も続いている。身体を痛めつけることは、一般常識や通念を捨てて、己自身になる、生命の原点に立ち返ることにつながる。これはお釈迦様が6年半荒野で修行したことと通ずる東洋的生命観であろう。

余分なものを削ぎ落して、ギリギリの生命そのものにまで自分を追い込むことで、そこから先に構築される人間的な思想や文化がより純化される。

分子生物学によって、知能や言語の分子レベルの現象が解明されたとき、唯物論的な身心一元論が実現する。日本社会はそれを受け入れるだろうか。

西洋キリスト教的な心身二元論

キリスト教は身体と精神(心)を別々のものとして扱う心身二元論の立場をとる。そして、精神は神様

にいただいた崇高なものであるが、身体は滅びゆくものとして扱われる。

筆者は、2016年に、心身二元論がキリスト教会でどのような教義として存在しているのか、どのように信徒に教えられるのか、ローマのバチカン教皇庁近くの書店やイエズス会本部図書館、グレゴリアン大学の先生に相談をして文献を探したが、出会えなかった。教義というよりは、基盤にある民衆信仰であるのかもしれない。

西洋科学は、人間を人間たらしめる精神は、神の御業であり、人智によって解明することはできないと考えているのかもしれない。御業と考えることによって、選民意識が生まれ、ヒト以外の動物を低く見る人間中心主義を生みだし、有色人種に対する人種的偏見も正当化される。

損か得かで考えると、人種主義や人間中心主義は得になることだから、言語起源や人類起源を宗教的タブーとしてとどめおき、あえて解明しないように、できるだけ煙に巻いておこうとする意図も感じる。

チョムスキー派言語学者が5年に一度集う国際言語学者会議の第20回(20ICL)が2018年に南アフリカのケープタウンで開催されたとき、前回まではテーマだった「言語の起源」がテーマから外れた。南アフリカは、初期人類化石(アウストラロピテクスアフリカヌス)と、喉頭降下がおきて母音を発声できるようになった現生人類化石のどちらもが発掘された土地だ。また、最古の現生人類遺跡クラシーズ河口洞窟も話題にされていない。

チョムスキー言語学や認知科学は、分子レベルの現象の究明に興味を示さない。これは一元論に通ずるからだろうか。

3. 二人の前衛：道元と荒川修作

隠されていた道元の本当の言葉

自分の頭で考えてユニークな仕事を残した日本人として、道元(1200-1253)があげられる。道元は日本思想史上最大最高の思想家だ。たとえば岩波書店の日本思想大系(1970年)は全67巻だが、一人で2巻あるのは道元だけだ。この2巻は正法眼蔵75巻本と弁道話、そしていわゆる新草12巻本を所収するのみで、道元の語録である「道元和尚廣録」(永平廣録ともよばれる)10巻は含まない。もし廣録も含めるなら、さらに2巻必要だった。それができなかったのは、漢文白文で書かれている廣録の読み下し文や現代語訳が当時まだ存在していなかったためである。

道元は、インドのお釈迦様から数えて第52代の仏祖である。仏教はインドで廃れたあと中国で栄え、

その後道元によって日本に持ち込まれ、発展した。

驚くべきことに、道元の業績や思想をまだ誰も評価できていない。偽書や改ざんが多いからだ。巷に道元本が相当数出回っているが、そのすべてが偽書である「正法眼蔵随聞記」を部分的・全面的に利用した研究である。そして、道元の真筆である語録「道元和尚廣録」と「七十五巻本正法眼蔵」だけを通して読んで書かれた研究書は拙著を除いてない。[1](道元は七十五巻本を書き直すつもりだったと嘘を書いた文献があり、道元研究者はそれを鵜呑みにしている。)

道元の真の言葉は、インパクトがあり、前衛的である。一例をあげる。

「汝もし不会なるは世尊の密語なり」(正法眼蔵第四十五 密語) あなたが理解できないのは、お釈迦様の秘密の教えだからです、と道元はいう。本や記事を読んで「わからない」と感じたら、静かな環境でゆっくりと考える、時間をおいて何回か読み直す。すると少しずつわかってくる。ピアジェのエピステモロジーを思い起こさせる。

「仏祖正伝の大道を禅宗と称ずべからず」(正法眼蔵第四十四 仏道) 大学入試問題ならば、道元は曹洞宗という禅宗を始めた人と答えれば正解だろう。しかし道元は著作で「お釈迦様から正しく伝えられた仏道を、禅宗と呼んではいけない」と厳しく釘を刺す。道元は禅宗という呼び方をはっきりと否定している。では仏道とは何か。道元の真筆を読んでほしい。

「経巻はこれ如来舍利なり、如来全身なり」(正法眼蔵第六十五 如来全身) 巷の道元本を読むと、道元は「只管打坐(何も考えずにひたすら座禅せよ)」と教えたことになっているが、それは偽書にもとづく言葉であり、道元は真逆の言葉を遺している。経巻はお釈迦様の遺骨であり、お釈迦様の全身である。お経の言葉がお釈迦様の骨であり全身だ。人間とは言葉だ。尊い本を読んで、その人に出会い、あなた自身を高めなさいと教える。

「雪山を大涅槃にたとえる」(正法眼蔵第六十三 発菩提心)とは、雪山が悟りの境地である。雪に覆われているヒマラヤの峰々は青空のもと白く輝いている、清らかで静かな世界である。美しいたとえである。

道元の言葉のごく一部を紹介した。これまで流布された常識をあらためて、まったく新しい道元像を組み立てる必要がある。

図式絵画から全身を刺激する建築へ

荒川修作(1936-2010)も人類の知的進化のための仕事を続けていた。荒川は、1960年代に渡米して、ニューヨークで活動した現代芸術家である。1970年に「意味のメカニズム」と名づけられた図式絵画を制

作する。それぞれの絵画に「中性化，位置づけと移動，あいまいな地帯，意味のエネルギー，意味の諸段階，拡大と縮小，意味の分裂，組み立て直し，逆転可能性，テクスチャー，図形化，感情，論理，記憶構築，知性の意味，検討と自己批判」といったタイトルがついている。これは美術作品というよりも，ヒトの認知メカニズムの研究成果といえそうである。



図1 三鷹天命反転住宅で講演中の荒川修作

1991年に荒川は日本人としては初めて国立近代美術館で個展を開く。[2] 作品を見る者が身体を斜面において目を閉じる作品「それから眼を閉じて」，「眼を閉じて」，カーテンで仕切られた空間に身体を投入する「知覚の降り立つ場(I)」，「極限で似るものたち」もあった。

1994年，岡山県奈義町に開館した奈義町現代美術館の展示室「太陽」は「奈義の竜安寺 建築する身体」と名づけられた。まっくらならせん階段をのぼっていくと，斜めになったコンクリート製の円筒のなかに出る。左右には竜安寺の石庭，天井と床には公園の遊具の鉄棒，シーソー，ベンチ。

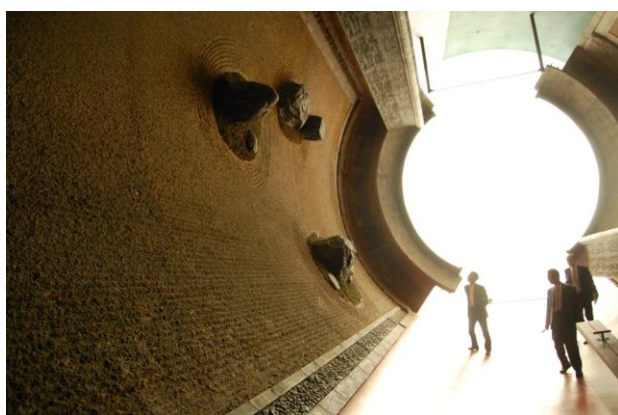


図2 奈義町現代美術館 展示室 太陽

1995年には岐阜県養老街に養老天命反転地ができる。ここは約2haのすり鉢型の公園で，順路がない。訪問者は自由に歩き回って，発見を楽しむ。

2005年には，東京都三鷹市に三鷹天命反転住宅が竣工する。1フロア3軒，三階建ての9軒の集合住

宅である。



図3 We have decided not to die.

グッゲンハイム SOHO 美術館で(1997)

2008年には，米国ニューヨーク州のロングアイランドの北端に近いところにバイオスクリープハウスが竣工。三鷹の仕掛けに加えて，光が縦横無尽に家のなかに差す仕掛けがある。

荒川は「人間は死ななくなる」と言った。あえて不安定でデコボコな大地に身を置くと，身体が活性化し，意識や感覚が研ぎ澄まされる。

荒川は自分の作品についてあまり言葉を遺していない。したがって荒川作品を理解するためには，自分でそこに足を運び，体験する必要がある。

道元と荒川修作に共通する異文化体験

道元と荒川修作にはいくつもの共通点がある。

二人とも20代で外国に出て師を得る。道元は中国に4年留学し，天童如浄の法を嗣いだ。荒川はニューヨークに行き，マルセル・デュシャンと出会う。

道元は中国に到着したときに，中国語がよく聞き取れなかったのも，すぐには天童寺に向かわず，寧波の港に三カ月とどまり，科挙の合格者に中国語の特訓を受ける。

荒川は，「実験展」の図録のP72に，うっすらとした横線が2,30本書き込まれた作品（無題，1961），P73に横線が濃くなった作品（1962年2月3日早朝，），P74に横線が途中からまがって三角形に結びつく作品（無題の形成，1962），P75, 76, 77に四隅に枠が描かれただけの作品（無題性，無題の形成，無題の形成 No.3）を掲載している。おそらく現地で耳にした英語が，「さっぱり聞き取れない」，「ちょっと聞き取れた」，「この言葉知っている」，「でも意味はわからない」といった具合に，認知プロセスが深まっていた様子を描いたものと思われる。

二人ともまったく日本語の通じない環境で，現地の言葉を覚えていったのだが，その際に脳内で起きている感覚の変化を敏感に感じ取ったに違いない。

世界を意識に写し取る

道元は示寂する前年の建長四年(1252)に廣録上堂語 501 で「身心脱落の功夫の初め、露柱懐胎す。(略)」という言葉を残す。現代語訳すると「身心脱落の努力のはじめに、裸の柱が宿る(略)」となる。これ自体は天童寺の住持だった宏智正覚(1091-1157)の「宏智廣録」にある言葉だ、これと荒川修作の「TUBE」という図式が重なる。(図録 P98-99, 拙著 PP26-28)

図では、Tube の表面に線が描かれ、四方八方に投射されている。大脳皮質ではなく、脳幹に意識が宿っているのだろうか。

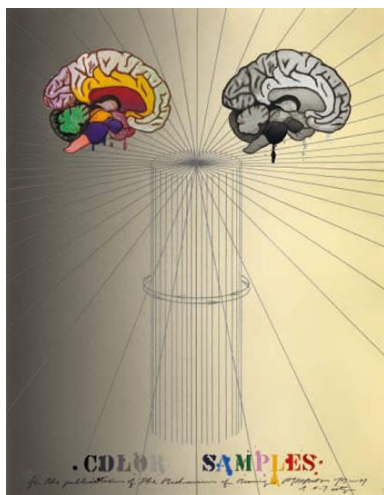


図4 Color Sample (荒川修作, 1979)

宏智正覚や道元が世界を認識するためのツールとした露柱を、荒川修作は図式絵画に表したのだろうか。学僧道元と現代芸術家荒川は、まったく同じ問題を同じように取り扱おうとしているのではないか。

世界中の前衛たちが解き明かそうとしてきたのは、どうすればヒトが哺乳類の脳を活用して、不可視の現象を科学するかという同じ問題だったのではないか。

4. デジタル言語学との共鳴

現代の洞窟生活

筆者は2007年4-5南アフリカ共和国にある最古の現生人類遺跡であるクラシーズ河口洞窟を訪問した。5月に帰国して、三か月後に倉富和子さんのご厚意によって、三鷹天命反転住宅にひと月ほど住むことができた。

床の上のものを片付け、照明は使わないこととして、現代の洞窟生活を送って、身体がどのように反応するかを確かめてみた。

床の上に直接身体を横たえて寝ると、朝身体が自然に床を叩いて、打楽器演奏が始まった。床がデコ

ボコなせいか、胸板を叩くだけでけっこう音が響く。そのうち自然と舌打ちが始まった。身体が7万年前の記憶を思い出したのだろうか。クリック子音も洞窟のなかで生まれたのだった。7万年前に洞窟に住んでいた狩猟採集民たちも、きっとドラミングと舌打ちを楽しんだのではないか。



図5 書斎で胸をドラミングすると舌打ちが始まる。クリック子音が生まれ、その後にオトガイが発達して喉頭降下がおき、母音を発声できる声道を獲得したという順序がこの時みえてきた。



図6 三鷹天命反転住宅の窓

生命論理は荒川の図で理解

筆者は2008年秋にGoogle検索をきっかけとして、イエルネの「免疫システムのネットワーク理論」と出会った。イエルネは、神経システムと免疫システムが非常によく似ていることを指摘していた。筆者は意味のメカニズムを見ていたので、この言葉が意味するものがすぐにわかった。

この生命論理とは、Aであるか、Aでないかという判断であり、これは抗原抗体反応で実現できるパターン認識である。そしてその結果、Aを次の行動や記憶想起に結びつけるのが図7のA+B=C式である。この図が示すように、AとBが空欄(入力箇所、パラメータ)で、+,=,Cのところが個別つくり込みである。

生命の論理を惑わさない生き方を

意味のメカニズムの最後は「16 検討と自己批判」というタイトルで、ヒトが寝ている場面である。これは、ヒトが寝ている間も、免疫細胞はネットワークを続けることを意味しているのだと思う。

そのために、個々の言葉の記憶と、五官の記憶、論理操作の記憶を、できるだけ正しておくことが望まれる。嘘をついたり、誤魔化していると、免疫細胞はどのようにふるまえばよいかわからない。

我々は言葉を誠実に、正直に、丁寧に使わなければならない。



図 10 現代という芸術アラカワ(2011.11)[3]

身体活性化は知能の活性化を促す

身心一元論的になると、身体と心、身体と知能はひとつである。三鷹や養老のデコボコの床を歩いたり、そこで横になると、私たちの身体は平たいところとは違う刺激を受ける。

天命反転のカラフルな床や壁や天井は、我々の意識に、大切なものはどこにあるかわからない、だから常にあらゆるものに気を配れと伝える。そして我々の身体はそれに対応できるようになる。

これは修験道や禊や回峰行とも通ずる日本的な知能の活性化手法といってもよいだろう。人間は自然の健全な刺激を全身に受けることで、健全な思考をできるようになる。自然が近くにないなら、天命反転の環境を人工的につくればよいのである。

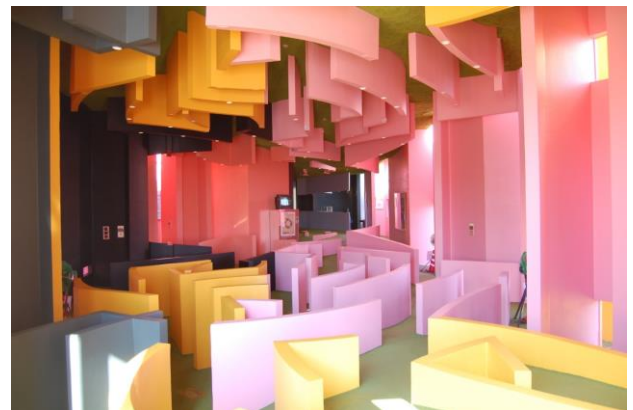


図 11 養老天命反転地オフィス

謝辞

発表の場を与えてくださった人工知能学会身体知研究会に感謝申し上げます。

参考文献

- [1] 得丸 道元を読み解く, 富山房インターナショナル, 2017
- [2] 荒川修作の実験展一見る者がつくられる場, 332p, 東京国立近代美術館, 1991
- [3] www.milestone-art.com column